いきいきまえばし人

受け継がれてきたことに感謝

佐藤 教裕さん・36歳
暴れ獅子リーダー
大胡町

大胡祇園まつりで荒々しく町内を練り歩く暴れ獅子。今年佐藤さんは、大胡町青年会長としてこれを取り仕切る。

「江戸時代末期に流行した疫病を収めるために始まったと伝えられています。獅子が激しく上下に動くのは、尾から風を入れて邪気を払うためなんです」

巨大な獅子は、青年会のメンバーの手で毎年作り直される。目入れは会長の役割だ。

「獅子の制作は、本番に向けてコミュニケーションを深める場でもあります。目を入れるときは魂を吹き込む気持ちでやります」

父や叔父が担いでいたこともあり、子どもの頃から憧れがあったという。

「一時故郷を離れたので26歳で初めて担ぎました。うれしかったですね。全身全霊でやりました。その後かじ取りを任されたときは、役から離れたくなかったので、きれいに回すことを考えました」

リーダーである今回はメンバーをまとめ、当日は先達を務める。

「暴れ獅子が受け継がれてきたことに感謝しています。無事にやり終え、伝統を次の代に伝えたいですね」

真剣に語る姿からは、責任感と暴れ獅子にかける思いがあふれていた。

vol.02
ART STORY
広がるアーツ前橋

アーツ前橋 ARTS MAEBASHI

第２回は医師の関根沙耶花さんが、「表現の森　協働としてのアート」展（本紙２・３ページ）に関連し、医療とアートを語ります。

問 アーツ前橋
☎ 027-230-1144

多様な表現を展覧会で体験してほしいと語る関根さん

私が医者になった理由、それは人が健康に幸せに生きることを支えたいと思ったから。しかし、医療に携わる中で医師と患者の依存関係から抜け出せない現実に直面しました。そこで「心の未病」をコンセプトに講演活動を開始。病気になって医療機関に頼る前に、身近でできる自立した心の健康づくりを広めたい。「病院を出よう。町へ出よう」を信条に、学びで自らの心を癒やす学校「ぐんまＨＨＣ」を立ち上げました。

活動の中でのアーツ前橋との出会いは感動的でした。美術館の枠組みを超え、まち全体が芸術活動の場であるとするアーツ前橋。芸術とは、人間の根源的欲求としての自己表現の一つであり、言葉によらない万国共通の対話手段となりうる。その芸術の持つ可能性を、福祉・医療の現場で役立てようという試みが始まりました。人が健康に幸せに生きるために欠かせないのは、自立と社会調和。そのためには自分自身を受け入れ、表現し、人と分かち合えることが大切だと思います。究極的には、医療も芸術も目指すところは一緒なのではないでしょうか。アーツ前橋と共に、医療や芸術の枠組みを超え、まち全体で「心の未病」に取り組んでいきたいと思います。

クローズアップ
CLOSE UP

ポンプ操法の技術競う

７月３日に消防団消防ポンプ操法大会を開催。20チームが参加しました。この大会は５人１チームで、的を放水で倒すまでの所要時間や隊員の行動を得点化し競うもの。強い日差しの下を全力で走り、表情は真剣そのもの。日頃の訓練の成果を発揮しました。

真夏日続き大盛況

今年も市民プールがオープンしました。連日続く真夏日も、子どもたちには絶好のレジャー日和。「毎日でも来たい」と元気に話していました。50m公認プールや幼児プールなど、大人から子どもまで家族で楽しめる施設がある同場。営業は９月４日㈰までです。

友好都市の交流深まる

６月17日から21日まで、本市友好都市の米・メナーシャ市から高校生８人と引率教師１人の合計９人が来橋しました。ホストファミリーと共に市内の名所を巡り、市立前橋高では茶道や書道を体験。日米の異文化交流の輪が、前橋で広がりました。